

カントの物自體とその由來

高橋道生

アーデイツケスを境として、カント文獻學は一先づその完結を見た、と言はれる際、今更物自體の問題を歴史的文獻學的見地から考察しようとすることは、屋上屋を重ねるかの如き觀があるが、今一つ此の未熟な試を許して頂き度い。

物自體解釋の歴史の概観

物自體の文獻學的考證

物自體と二重觸發

範疇の内在的使用と超驗的使用

先批判期實在論の諸相

範疇の理論的使用と實踐的使用

短日月の間に、而かも廣大な範圍に亘つて偉大な思想的影響を及ぼした哲學者として、カントの右に出る者はあるまい、と考へる。カントに關する文獻は遙かアリストテレスを凌駕する、と稱せられて居る。既に十八世紀末に於て、ブロイセンではカントの著作は婦人化粧室にも見出されたし、又理髮師はその術語を口にしたと云はれて居る。(Kulpe; Immanuel Kant S. 10) 併し又、カント程多くの誤解と非難を受け、た哲學者も少い。第一批判の公にされるや、間もなく有名なガルフェーフエーフェーダー

の批評に逢著した。この爲めにプロレゴメナの豫定計畫は變せられたし、又第二版の大改訂もかゝる誤解を防止せんがためであつた。かくて漸くカントの獨創的思想が理解せられるや、既に第二版の出版年代(一七八七)と時を同じうして、ヤコービが物自體の問題に口火をつけカントを烈しく攻撃した。(David Hume über den Glauben; oder Realismus und Idealismus) 併し、ヤコービ自身は獨斷哲學にも、批判哲學にも反對し、信念によりライブニッツ的實在論を説くものである。

以下、フイヒテに至る迄は Valinger: Kommentar zu Kants Kritik d. r. V. II S. 36 ff. 及び Kuno Fischer: Geschichte der neueren Philosophie VI 等を参照したるものが多く。

ヤコービによれば、カントは、我々を觸發して表象を生せしめるところの對象を假定して居るが、併しかゝる對象は經驗的とするも、超驗的とするも、等しくカントの敎説によれば矛盾である。何者、經驗的對象はカントによれば、我々の外に存するものではなく、我々の表象に過ぎない。故に直觀の外に、かゝる經驗的對象を餘計に加へるのは單に思惟により附加されたものであり、(hinzugedacht) 單なる表象に過ぎない。併し、對象を超驗的と解しても、それはカント自身の説により蓋然的概念でしかありえない。即ち、それは思惟により案出されたものであり、(erfacht) 再び單なる表象で

ある。故に對象が感能を觸發して、始めて表象が生ずる、とするのは矛盾である。併し此の假定なくしては感性も無意味である。「私はかの假定なくしては其の體系に入ることは出来ない。而かも此の假定があつては、其處に留り得ない」。かくて、ヤコービは先驗的觀念論者は未曾有の最も力強い觀念識を主張する勇氣を有せねばならぬと揚言した。ベック、マイモン、フイヒテ等はかゝる勇氣を有したものであるが、就中フイヒテは痛くヤコービに共鳴して居り、ヤコービも亦フイヒテをばカントの缺陷を除去した整合的な思索家と稱讚して居る。彼はフイヒテ宛の手紙中に「頑固者共を威嚇して貴下を王と認めしめ、ケーニツヒスベルクの洗禮者は併し貴下の單なる先觸と思はしめられよ」と言つて居る。

ヤコービに次いで、所在かゝる非難があげられるに至つたが、最も重要な人にシユルツェがある。(Gottlob Ernst Schulze; Aenesidemus 1792) シユルツェによれば、理性批判は、凡ての人間認識は客觀的に存在する對象の我々の感能に對する作用から始まり、而して此の對象が心性の發動に最初の機縁を興へる、と云ふ命題から出發して居るが、之は全然無證明な *petitio principii* なるのみならず、その歸結は全く矛盾して居る。前提と歸結との間に於けるかゝる對比は獨斷論に於てさへ見られない。我々の表

象の外なる對象は感性的表象と全然異つた獨立的存在であるが故に、範疇演繹論により我々は之に原因なる概念も現實性なる概念も適用することは出来ない。シュルツェは又ラインホルトが「單に表象せられたるもの」と「現實的な物自體」の區別によつて矛盾を避けようとするのは、徒らに矛盾を深めるに過ぎないと非難して居る。併しシュルツェ元來の意向はカントやラインホルトが物自體を假定したのを非難するのではなく、唯矛盾を指摘するのであり、彼自身は實在論者なのである。

自らの強い實踐的要求の安住地をば批判主義の中に見出して、その弘通に努力したラインホルトは、物自體が我々を觸發して我々に素材を興へると云ふ言ひ方を避けるが、併し彼は物自體が素材の根底にある、との考を捨てない。(Versuch einer neuen Theorie des menschlichen Vorstellungsvermögens 1789) 唯、我々は物自體が作用すると思惟するのみであり、現實的な觸發があるわけではないのである。物自體はラインホルトに於てはかゝる不安定状態にあつたのだから、後彼がフィヒテの影響の下に、物自體をば單なる幻影として捨て去つたのも不思議ではない。

既に一七九〇年マイモン(Salomon Maimon)は物自體を捨て去つて居る。(Versuch

über die Transzendentalphilosophie 1790; Kritische Untersuchungen über den menschlichen Geist 1797)

我々は、表象力の外なる物自體をば原因として認めることは出来ない。何者、此の場合には圖式が缺けて居るから。所謂、所與は單に發生の仕方が分らないところの表象を意味するのである。即ちそれにつき我々が不完全な意識しか有しないところの或るものを意味する。故に「單に與へられたるもの」(das bloss Gegebene) 即ち表象力の意識なくして現在して居るところのものは、無理數の根の如く、漸近的にのみ接近し得る系列の限界を意味する單なる理念である。又ラインホルトや獨斷論者の假定する物自體は空想である。或は物自體は代數の $\sqrt{-a}$ とも云へる。併し之は客觀規定のためではなく、反對にかゝる客觀の不可能性を表はすためである。

次にベック(Jacob Sigismund Beck; Erläuternder Auszug aus den kritischen Schriften des Herrn Prof. Kant 1793—96)も物自體を否定し、感性をば自發的な根原的表象作用の能力とする。ベックによれば、カントが實在論の術語を用ひたのは先驗的觀念論に慣れない人の爲めに、教育的手段として用ひたのに過ぎない。之によつて次第に先驗的觀念論に導いて行かうとするのである。人が攻撃するのは此の故を知らない爲めであり、元來、先驗的觀念論は常識と融和したものである。それは常識と同じく對象が我々を觸發して、我々の中に感覺を生ぜしめると言ふ。即ち根原的表象作用は現象を

定立し、現象は木や石や光として我々を觸發する。先驗的見地から見れば、凡て此等の木、石、光等は根原的に定立せられた或るものである。經體的見地からすれば、此等は我々に對し存在し、我々を觸發し、而して我々に感覺を與へる。かくて、ベックは、客觀が全體的にも部分的にも所與でなく生産されたものであることを主張する。此の思想は上に記した三卷に分れて居る彼の主著の最後の卷(Einzig möglicher Standpunkt, aus welchem die kritische Philosophie beurteilt werden muss)に最も明かである。フイヒテ自身「知識學を研究する人々には「最良の準備として此の著を薦める」と言つて居る。

(Fichtes Werke III S. 28 Anm.)

かくの如く、フイヒテ哲學の本質的契機は既に先行哲學者によつて準備せられて居るのであるが、我は我以外の何物によつても觸發せられない、非我は我により始めて定立されるものであるとの思想は「Recension des Aenesidemus」(1794)に表明されて居り「Grundlage der gesanten Wissenschaftslehre」で積極的な體系となつて居るのは人の知るところである。フイヒテによれば、我に作用し我を觸發する物自體なる假定は本來の先驗的立場に於ては妥當しない。或る實在根據の我に對する作用などは絶對に考へられない。純粹な而して唯知的直觀によつてのみ理解される我の活動こそ、唯

一 根原的のものである。我はその思惟活動により、種々なる定立に於て現象界を定立する。而して唯經驗的な我のみが、此の世界をば後から物自體など、理解するのである。カントの功績は哲學から物自體を去り、理性を解放した點にある、と云ふ風にフイヒテは解するのである。一七九七年の *Zweite Einleitung in die Wissenschaftslehre* では「カントが、自分は感覺をば物自體の印象から導き出すものであるとか、或は、私の用語法を用ふれば、哲學に於て感覺はそれ自體に我々の外に存在するところの超驗的對象により説明さるべきものであるとか、明確に説明しない限り、私はかのカント註釋家等がカントに就いて語るところをば信じないであらう。カントが之をなすならば、私は理性批判をば頭腦の産物とよりは、寧ろ奇妙不可思議な偶然の産物と見なすであらう。」と如何にも性格的なことを述べて居る。(Fichtes Werke III S. 70)

フイヒテの説は、或る人達の如くライブニッツの意識段階説の復活であると考へてもよいと思ふ。(M. Wundt; Kant als Metaphysiker S. 523) 即ち我の無意識的生産中に客觀界は生じ、我の意識的生産中に對象の認識が生じるのである。事實フイヒテの思想發展に於てライブニッツの影響は重要であり、知識學期に於ても「ライブニッツは恐らく確信を有して居た哲學史上唯一の確信者であつた」とライブニッツを激賞

して居る。

併し、カント自身は極めて簡單ではあるが公に釋明して知識學を否定して居る。

(*Erklärung in Beziehung auf Fichtes Wissenschaftslehre* 1799) 其處でカントは「批判」を理解するには、感性に關してカントの言ふところをば文字通りにとらずに、ベック又はフイヒテの立場からすべきである、と言ふ批評家に反對し「批判は必ず文字通りに理解せねばならぬ」と主張して居る。しかしながら、哲學界の宿題としてカント哲學の發展を直接に制約した物自體の問題はフイヒテで一先づ落著したのであつて、此の問題が再び論争の渦中に投せられるやうになつたのは十九世紀のカント復興以來である。唯、此の間カント解釋に關して注意すべきはショーペンハウエルである。ショーペンハウエルは表象の直接原因としての我々の外なる超越的な、彼が死物に等しいと考へた物自體を假定するのに強く反對するのであるが、物自體そのものを排斥するのではない。ショーペンハウエルの見たカントの最大功績は、カントが現象と物自體とを截然分離したことにあるのであつて、此の點でシェリングやヘーゲルを三文の價値もない如く斷ずるのである。(Die Welt als Wille und Vorstellung II. Anhang, Kritik der kantischen Philosophie (Reclam) S. 535) ショーペンハウエルによれば、我々は表

象の道によつては、表象以上には一步も出ることには出来ないのであるから「若し我々が單に表象する存在者であるならば、物自體に至るの道は全く我々に鎖されて居るであらう」。(Ibid. S. 638) 而して彼が積極的に規定した物自體が意志であることは餘りにも有名である。

Kuno

カント復興は本來前世紀即ち十九世紀六十年代から始まる。これが魁はクノー・

Fischer
Fortlage

ファイシャーであり、之に刺戟されて「カントに還れ」のスローガンはフォルトライゲや

Zeller
Fänge

ツェラー等により力強く叫ばれたのである。ランゲは彼の名著によつてカント的

立場から唯物論に最後の止めを刺したかと思へば、他方、ヘルムホルツは生理學の成

Otto Liebmann

果と批判哲學との合致を報告して居る。オットー・リーブマン又有名な一人である。

カント復興を知るには Falckenberg: Geschichte der neueren Philosophie S. 639, ff. を参照するのが便利である。

併し單にカント復興に止まらず、カント哲學を歴史から離れて發展せしめ、新カント哲學を確立して、新の附加語に相應しく體系的組織的に偉大な寄與を哲學に致したのはコーエン及びリッケルトであらう。同時に又カント直後の問題が再燃し出したのであつて、カントの復興は物自體の問題の復興でもあつた。即ちカント復興に參畫した人々の物自體に對する態度は一定して居るとは言へない。之がカント

哲學の體系的解釋と發展とに於てならば、不思議ではないが、歴史的カントの理解に於てさへ正反對の主張が時として見られる。併し形而上學的傾向を排して、カントに於ける癥と目せられる物自體をば單なる限界概念、理念、統制的原理以上に認めないことが、少くとも過去に於て有力であつた。勿論、物自體による觸發即ち超驗的觸發は認めない。而して此のことは彼等が「ありしカント」と「あるべきカント」とを區別しなかつた結果とし、忠實なカント文獻學者との間に爭論を惹起したのであつた。

カントに於ける物自體の理解を觀念論的と實在論的とに分つのは普通の事である。此等を簡單に知るには Müller-Freienfels, *Die Philosophie des zwanzigsten Jahrhunderts* S. 32 ff. が便利であるが、尙此の外に現象的解釋を加へることが出来ると思ふ。

新カント派の思想は我が國に於て遍く知られて居るものであるが、敘述の體裁を揃へるため、物自體に關する限り蛇足を加へる。純粹理性批判中、先驗的分析論の根本精神をば最も整合的に發展せしめて、認識論に重心を置き、所謂先驗的方法を高唱して、科學的經驗の內在的制約の確立を目指したマールブルク派の人々は、カントの物自體をば實在論的に解釋するのに反對する。例へばコーエンは物自體、無制約者、限界概念、理念、統制的原理等を同一視し、物自體は與へられたものでなく、課題とし與へられたものであると考へる。(Cohen, *Kants Theorie der Erfahrung* S. 656, 661 usw.) 要す

るにコーエンの認めた第一批判の課題は、所謂經驗理説の確立であつて、感覺の起原を問ふたり、我に作用する物自體と云ふが如き心理學的形而上學的假説の樹立ではない。併し自己の體系の發展と共に、コーエンの論理主義は單なる認識論を遙か後にして居る。カッシラーによれば第一批判の先驗的感性論で言ふ物自體は獨斷論的であり、先驗的分析論で言ふ物自體と意味を異にする。物自體は唯綜合的機能の相關者で、言はゞ投影として生じたものに過ぎない。物自體は次第に具體的内容を失ひ、理論的考察の究極に於ては、其は單に經驗に綜合的統一を與へるための統制的原理に過ぎなくなつた、と言ふ。(Cassirer, Das Erkenntnisproblem II, S. 742 ff.) 又ブツヘナウによれば物自體は現象に體系的統一を與へるための限界概念であり、單なる觀點に過ぎない。元來カントにとつては、與へられるとは經驗に關係せしめられる、と云ふ事を意味すると主張する。(Buchenau, Grundproblem der Kritik d. r. V. S. 170 ff.)。同じく新カント派に數へられるが、文化價値に敏感なのを特色とする西南派、或はバーデン派も物自體の解釋に於ては、マールブルク派と異ならない。範疇の前進によつて超越的存在を否定するリッケルトは、物自體を承認してカントを實在論的に解釋する。リールやフォルケルトに反對して居る。(Der Gegenstand der Erkenntnis 3. Aufl. S. 27, 84)

要するに客觀は主觀に對する客觀として、即ち思惟する意識に對してのみ意義を有する。かくて客觀は結局、超個人的我として、それ自體は絕對に意識内容たり得ないどころの「意識一般」に依屬することになるのであるが、之はコーエン以上にカント後の獨逸觀念論殊にフイヒテに接近して居る。これ人が西南派の新カント主義を時に新フイヒテ主義と呼ぶ所以である。

此等の理想主義的な新カント主義は個別科學の認識論的基礎を明かにし、普遍妥當的認識、絕對價值等を唱導した點にその功績を認めねばならないが、併し對象の產出と言ひ、ゾルレン^{Sollen}への歸順と言ひ、何れも現實生活に對しては餘りに空虚に響いたのは或る人の言ふ如くである。(Miller-Freienfels, *ibid.* S. 32) 物理學にしても、生物學にしても歴史にしても、それ等の中の對象は餘りにも實在的である。カント解釋に於てもかゝる種類の理想主義に對し反動が生じつゝある。即ちカントの觀念論的解釋に反對し、カントをば實在論的解釋に於て生かさうとする有力な努力がある。彼等はカントをば新しい形而上學の創始者とし、形而上學の破壊者と見ることに反對する。従つて物自體をも單に消極的ではなく、積極的實在論的に解し、物自體による超驗的觸發さへ主張するのである。此の中には、カントの發展と完全性を目的

とする上述の理想主義に對する反動とし體系的目的を排して、カントの本文を文獻學的に正確忠實に解釋し、歴史的カントをば叙述せんとする努力をも含ませることが出来る。既に十九世紀からしてフィッシャーやリールは物自體をば實在論的に解釋して居る。リールは深入することを避けて居るが、(Riehl, *Der philosophische Kriticismus* I. S. 400) フィッシャーは物自體と我自體とを類推的に考へんとして居る。即ち物質界の基底にあつて、我自體を觸發する物自體は前者と本質を同ふするものである。若し物自體と我自體とが全然異質的な實體であれば、兩者の關聯と云ふことは考へられない。我々の表象力、認識能力の基底にあるXが意志であり、自由である如く、外的現象、物體界の基底にあるYも亦意志であり、自由であると言ふ。(Kuno Fischer, *Gesch. d. neu. Phil.* V. S. 609 ff.) かゝる物自體の實在論的解釋は二十世紀に入り益々發展して行き、別にマールブルク派や西南派の如く、まとまつた學派とはなつてゐないやうであるが、兎に角有力な對抗團體となつて居る。例へばフォルケルトによれば、物自體は主觀の感性に作用する、即ち之を刺戟し、又は觸發する。此の物自體と主觀の感性的方面との相互作用により現象が生ずる。(Volkelt, *Kants Erkenntnistheorie* S. 100)

此の外煩を避けるため名前だけを言へば Paulsen, Külpe, Messer, Study, Frischeisen-Köh-

976
Ier, Pechner, Pfordten, Erhardt, Adickes, M. Wundt 等が數へられるであらう。アーデイックスの解釋は後に觸れねばならないから、今は少し變つて居るエルハルトの物自體觀を窺ふことにする。エルハルトによれば、カントの物自體を觀念論的に解するのは全然非カント的であるのに、かゝる解釋を以て批判主義の眞意を得たりと信ずる人の今日尙多いのは遺憾である。カントは物自體をば、何等の理由も示さずに、第一批判で前提して居る。併し物自體は我々の感覺、知覺の起原を説明するのに必要である。「我々の心性を觸發する」ところの對象は物自體であり、現象ではない。多くの人がなす如く現象に觸發を許すのは矛盾である。何者、現象は同時に原因であり、結果であることになるから。若し外的現象に對應する物自體が存しないとすれば、我々の感覺の原因は我々自身の中に求めねばならない。此の場合とても物自體の概念を逃れることは出来ない。では物自體は如何なるものであらうか。エルハルトの言ふ物自體は力である。併し其は空間中に存するものではない。空間は我々の表象の仕方であるから、物の感性的性質、空間的性質は認識主觀により産出せられて物の中に移入されたものに過ぎない。併し、例へば抵抗力や凝集力の如き力は主觀から生ずることは出来ない。力は現實に表象から獨立して存在するものである。

故に其は物自體である。従つて我々の主觀的な把握に對し、空間を充實する物質として現象するところの物自體は實は力である。(Erhardt, Bleibendes und Vergängliches in der Philosophie Kants S. 85 ff.)之によつても分る如く、カントにより非常に遠ざけられたと見えた物自體はエルハルトにより目前迄引き寄せられたのである。かゝる解釋は、その自然哲學で力學的物質構成説をとつて居るのに、カントは此の力が如何なる程度の實在性を有するかを明にシなかつた點を注意せしめるにはよいが、先驗的觀念論を餘り通俗化したものである。

最近カント解釋に於て注意すべき人はハイデツガーである。ハイデツガーのカントの物自體に對する態度は彼が「獨逸觀念論に起つた物自體に對する戰は、カントが戰ひ取つた次のことの漸次的忘却以外の何を意味しようか。即ち形而上學の內的可能性及び必然性即ち形而上學の本質は、有限性の問題の根源的な展開及び鋭い支持により、根底に於て保存支持されうるのである」と言つたことからしても理解される。(Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik S. 234)故に現象學的立場は批判主義と結び難いと考へるのは杞憂である。歴史的カントが問題となるとき、我々はハイデツガーの解釋を直ちに認めることは出来ないが、最も新しい哲學者の手によつ

てカントに今更生命が吹き込まれたことを喜ぶのである。ハイデッガーによれば、直観の有限性の特質は受容性に存する。「有限的直観は受けとらるべきものが現はれることなしには受けとることは出来ない。有限的直観は本質上、直観に於ける可直観的なものにより、先づ觸發せられねばならない。」(ibid. S. 23 ff.) 又、ハイデッガーによれば物自體と現象との區別は *das Seiende* の無限的認識と有限的認識とに對する二の關係に對應して居る。即ち現象なる語は有限的認識の *Gegenstand* としての *das Seiende* を意味して居る。正確に言ふとき、有限的認識に對してのみ *Gegenstand* がありうるのである。有限的認識のみが *das schon Seiende* に渡されて居る。無限的認識には *das schon Seiende* が對立することはあり得ない。無限的認識或は絶對認識は *das Seiende* をば *Entstehen-lassen* に於てのみ有しうる。即ち其に於ては *das Seiende* は *Seiendes an sich* であり、本來 *Gegen-stand* と言はるべきでなく *Ent-stand* と言はるべきものである。(ibid. S. 28 ff.) 要するに、ハイデッガーによればカントに於ける物自體と現象との區別は、同じ *das Seiende* の無限認識に對する *Ent-stand* と有限的認識に對する *Gegen-stand* との區別に當るものと解すべきなのである。

此の外カントの物自體を論じて居る人は多いのであるが、内容的には別段新しい

ものはないし、且つ我々本來の關心は、寧ろ未だ論せられて居らないカントに於ける物自體の由來にあるのだから、之で歴史の概觀を終へる。次に、カントは物自體や、それによる觸發を説かなかつたと言ふ人に答へるため、カントの本文につき少しばかり文獻學的な考證をせねばならない。之に就いてはアーディツケスの勞を利用することが多い。(Adickes, Kant und das Ding an sich)

カントが物自體と現象との關係表象と觸發との關係を實在論的に主張して居る個所は頗る多いのであるが、煩雜であるから代表的なものだけをあげる。殊にプロレゴメナでは物自體と現象との關係が反復、説かれて居るが、その中、次の句は明確に超驗的觸發を説いて居る。

「若し我々が感能の對象をば、當然ではあるが、單なる現象と見なすならば、これから同時に感能の對象の根底に物自體そのものが存在することを承認する。尤も、我々が物自體に就いて知るところは、それ自體に如何なる性質のものであるかと云ふことではなくして、單にその現象である。即ち我々の感能が此の未知的なあるものによつて觸發される仕方のみである。」(W. IV S. 314 f.)

又純粹理性批判の先驗的感性論に於ける、感性を觸發する對象は物自體と解する必要は必ずしもないことを認めるが、カントが物自體を實在論的に解して居ることは第一版、第二版共に變りはない。

「現象は常に二つの方面を有する。即ち一面に於ては客觀自體そのものが(それを直觀する仕方に無關係に)考察される。従つてその性質は常に蓋然的にとゞまる。他は此の對象の直觀の形式が注意される方面である。此の形式は對象自體に於ていはなく、對象の現象する主觀に求められねばならぬが、併し此の對象の現象には現實的心然的に屬するものである」。(A. S. 38, B. S. 55)

「外的現象の根底に存して我々の感能を觸發し、空間形態等の表象を生せしめるところの或るもの、即ち本體(Noumenon)(或は、より適切に超驗的對象として考へられた此の或るものは、同時に又思惟の主體でありうる。勿論、我々の外的感能が、之により觸發されるところの仕方によつては、何等表象、意志等の直觀は得られずして、單に空間及びその規定の直觀が得られるのみであるが」。(A. S. 358)

「現象はそれ自體には何ものでもないが故に、其等をば單なる表象として規定するところの超驗的對象が現象の根底に存せねばならぬ」。(A. S. 538, B. S. 566)

「實踐理性批判」では

「上述の原因性なる概念を本體に適用する制約を發見するには、何故我々は此の概念を経験對象に適用するのに満足しないで、これを又物自體そのものに適用しようとするのであるか、と云ふことを想起しさへすればよい。すると、我々に此のことを必然ならしめるのは、理論的目的ではなくして實踐的目的である、と云ふことが直ぐ明かになる」。(W. V. S. 54)

又「判斷力批判」では、

「自然概念はその對象をば直觀に於て表象するが、併し物自體として々はなく、單なる現象として表象するのである。之に反し、自由概念はその客觀の中に物自體そのものを表象するが、併し直觀の中に表象しない。従つて、自然概念も自由概念も共に、物自體としてのその客觀について(思惟する主觀についてさへ)理論的認識を與へることは出來なからず」。(W. V. S. 175)

「悟性は自然に對する先天的な法則の可能性により、次のことについて證明を與へる。即ち自然は我々により、唯現象としてのみ知られるものである。従つて同時に自然はその超驗的基體に對する指標である、と。併し悟性は此の基體をば全然無規

982
定にして置く』。(W. V S. 196)

以上カントの三大批判書の外に「道德形而上學原論」では「現象と物自體との區別が一度なされるや、換言すればその聯關上、一度意識されるや、自らの結果として、我々は現象の背後に現象ならぬ或るもの、即ち物自體を認容し、假定せねばならぬ。尤も、物自體は我々には決して知られず、知られるものは唯我々を觸發する仕方のみであるが故に、我々は決して物自體には近づきえず、且それ等がそれ自體に何であるかを決して知りえないが』。(W. IV S. 451)

更に「自然科學の形而上學的基礎」では

「空間は物自體そのものゝ性質ではない。故に物質は物自體そのものではなく、我々の外的感能一般の單なる現象であり、空間は現象の本質的形式である。」

此等の僅かの引用によつても、カントの物自體が實在論的に解釋せらるべきものであるのは明白である。我々は後、完成期の思想を未完成期の思想を以て解することの時に不當なのを意識しつゝ、カントの先批判期に於ける實在論の諸相を檢討することにより、更に實在論的解釋を裏書しようと思ふ。

次に問題となるのは、物自體、表象、現象、感覺の關係である。一體、カントは、感覺の原因を物自體に求めたのであるか。それとも經驗的對象に求めたのであるか。感覺はカント自身も認めて居る如く、感能の單なる變容であり、全然個人的なものである。カントは或る場合には、感覺の原因を物自體そのものに歸し、現象は全然我の單なる表象として、我から獨立の外物を認めて居ない。例へば、先天的直觀の能力は、現象の質料即ち現象に於て感覺であるところのものに關しないで、現象の形式である空間時間のみに關する⁹ (Prolegomena § 11) と言つて居る如く、現象は質料的にも形式的にも全然主觀的のもので、感覺の原因は物自體である。併し又或る場合には、此の持續的なるものゝ知覺が可能となるのは、全く我の外なるものによるので、その單なる表象によるのではな¹⁰ (B.S. 275) と言つて居る如く、外物と感覺とを區別し、感覺は我と獨立なる外物により與へられるものと説いて居る。前の場合には、現象、經驗的對象、外物等は、我的「單なる表象」であるが、後の場合には、感覺は單に主觀に於ける變化に過ぎないが、現象、經驗的對象、外物等は、我より獨立に空間中に存在する。フィッシャーやエルハルトは物自體が我々を觸發して感覺が生ずると考へて居ることは既に述べた。現象の質料である感覺が全然個人的であり、その形式が超個人的である

ことは理解されるが、これだけでは外物、經驗的對象の實在性の程度は曖昧にどこまでも出出来る。カントが主觀的感覺と經驗的對象と物自體との區別を一義的に決定せずに曖昧にして置いたことからして、シヨールペンハウエルやフィッシャーの第二版改惡論が出た次第である。例へばフィッシャーによれば、カントは第二版の序文及び「觀念論論駁」の章で、我々の外なる空間的對象をば表象から獨立なもの、即ち物自體とした。之は外物は我の「單なる表象」とした彼の根本敎説と矛盾するものであり、カントは物自體と現象とを混同したと攻撃する。(Fischer, Gesch. d. neu. Phil. V. S. 587) 勿論、嚴密な意味で言ふ對象は範疇によつて規定されたものでなければならぬから今此處で言ふ對象は未だかゝる規定に對する素材と考ふべきであるが、兎に角、第二版改惡論にもかゝはらず、物自體の現象であり、その限り「單なる表象」であるべき外物をば、感覺から獨立な空間的存在として居る個所は既に第一版にもあるのである。又第二版改惡論は既にヤコービにある。

「觀念論論駁」に對するシヨールペンハウエル及びフィッシャーの攻撃については天野先生の詳細な論述がある。(天野貞祐譯純粹理性批判) 譯者序説)

元來フアイヒンゲルが言ふ如く、(Vaihinger, Commentar zu Kant's Kr. d. r. V. II S. 7 ff.) カントに於て對象と言ふ場合には、我々の經驗的表象に與へられるが如き經驗的客

觀と、我々の表象の仕方に無關係にそれ自體の状態にあるやうな超驗的對象との二義があるので、之を區別しないと、カントの言ふことが不可解になる。既に Schmidt, Schultz, Hölder, H. Wolff, Biedermann, Drobisch, Lehmann, B. Erdmann 等は第一次客觀第二次客觀とか、形而上學的對象、物理學的對象とかと云ふ風に、カントに於ける對象を二義に區別して居る。之からして觸發に二種類が考へられるので、經驗的觸發に對する經驗的感性と、超驗的觸發に對する超驗的感性とを區別する人さへある。カントが經驗的觸發を説いて居る著しい例は「觀念論論駁」の章である。此處でカントは、我々の表象から獨立な併し物自體と同一ではない對象を假定して居る。即ち物質的外界と我々の表象との關係がカント自身の本來の立場と矛盾的に考へられて居ると非難されるのである。一方では、物體界は「單なる表象であり、我々を觸發するのは物自體であるのに、他方では、物體界は我々の表象から獨立な實在であり、表象の原因として我々を觸發するのは現象的對象であると解せられる。要するにカントの所説を整合的に解釋するには、物自體による超驗的觸發と經驗的對象による經驗的觸發とを假定せざるを得ないのであつて、之が所謂二重觸發である。之と今迄人々が考へた觸發の解釋とを綜合すると、我々を觸發する對象は何かこの問題に對し、三様

の可能な回答が與へられたことになる。(一)我々を觸發するのは物自體である。此の場合範疇の問題を別とするも、カントの場合不都合の生ずることは上述のことで明かである。(二)我々を觸發するのは空間中の經驗的對象である。併し、此の場合には範疇の問題は生じないとするも、觸發により始めて生ずるものが觸發の原因となる、と云ふ不合理に陥る。一體カントによれば、現象は我々の表象の結果であつて、我々の表象の原因ではないのではなからうか。(三)我々を觸發するのは物自體及び經驗的對象である。(cf. Vaihinger, *ibid.* S. 53) 之にも勿論難點が伴ふのであるが、カントを整合的に解釋するには之によるより外はないと思はれるから、以下少し具體的に考へて見よう。ヌミスは感覺現象、物自體といふ三分法を採つて居る個所として、B.S. 34, A.S. 166, A.S. 374ff., B.S. 274 f., A.S. 723 = B.S. 751 をあげ、感覺即現象、物自體の二分法を採つて居る個所として、A.S. 50 = B.S. 74, B.S. 59; Prolegomena S 12; Fortschritte, (Hartenstein VIII S. 527) 等をあげて居るが、(Smith, *A Commentary to Kants Critique of Pure Reason* S. 84) 今は簡單の爲め、先驗的感性論の A.S. 28 ff. 及び第一版、第二版に共通な A.S. 29 = B.S. 45f. を考察することにする。

此處でカントは明かに超驗的觸發の外に經驗的觸發を説き、現象としての對象に

先天的な性質、例へば空間充實と、個々の主觀に全然依屬する第二次的後天的な性質とを區別して居る。

「酒のうまさは酒の客觀的限定には屬しない。従つて現象としての客觀に屬さないで、却つて酒を味ふ主觀に於ける感能の特殊な性質に屬するものである。色は物體の直觀に屬するものであるが、物體の性質ではなく、光によつて或る仕方で觸發されるどころの視覺の變狀に過ぎない。之に反して、外的客觀の制約としての空間は現象又は現象の直觀に必然的に屬する。味とか色とかは對象が之によつてのみ、我々の感能の客觀となりうるどころの必然的制約ではない。これは特殊な機制に偶然及ぼされた結果として現象と結合したのに過ぎない」。(圈點は筆者の附加)

之は第二版では削除されたが、同所にあげられた薔薇の例はそのまま、第二版でも保留せられて居る。

「薔薇は經驗的意味に於て物自體として認められるが、而かもそれは異つた眼には異つた色に見えるのである。……空間に於て直觀せられる所の凡てのものは事物自體(Sache an sich)ではなく、又空間は多分物自體に屬するであらう所の形式ではなく、却つて對象自體(Gegenstände an sich)は我々には全然不可知である。我々が外的對

象と名づけるものは我々の感性の表象に過ぎないし、又感性の形式は空間であるが、その眞の相關者即ち物自體(Ding an sich)は空間によつては認識せられない。」

此の二つの引用を比較して見ると、フイシャー等の第二版改悪論に反して、第一版の方が外的客觀物體と感覺とを區別して居り、第二版の方は外的對象と感性の表象とを同一視して居る。併し兎に角、カントは感覺をば感能の變客とし、これから獨立な外界とを區別して居るが、此の外界は又カントの敎説によれば、感性の單なる表象に過ぎない。色、聲、香味等は個々の感能に屬する偶然的なものであるが、空間は必然的に現象に屬する。薔薇は經驗的意味に於て物自體と見られうるのであるが、その色は純主觀的なものであり、我々の機制に依屬するものである。換言すれば、色は薔薇なる經驗的對象が視覺を觸發した所産である、と考へられる。かくて後天的な感覺の客觀性は全然偶然的なものであるが、現象に於ける先天的、超個人的な性質、換言すれば自然科学的世界像の客觀性は、却つて二重觸發によつて確保せられる。要するに、自然科学的世界像は感覺的世界の原因であるが、自然科学的世界像の原因は全然不可知的な物自體である。或は又、感能的性質はロツクに於ける如く、物質性に基くのであるが、此の物質性は客觀的意味に於ては、あるが、畢竟現象に過ぎない。カ

ント自身ロックの區別(指名はしないが)は經驗的區別であり、先驗的區別ではないと言つて居る。(A.S. 45 = B.S. 65) 即ち第二次性のない現象、自然科學的實在論が表象するやうな現象は超驗的主觀と物自體との觸發より生ずると云ふ風に考へる人もある。(Drexler, Die doppelte Affektion des erkennenden Subjekt S. 28 f.) かくの如き二重觸發を假定すれば、自然科學との正面衝突は回避せられると思はれる。此の考は多くの人に採用せられて居るのであり、カント自身かゝる假定によつてのみ「觀念論論駁」に對する非難を避けられると認めて居るやうであるが、之は自然なことである。即ち所謂 Opus postumum (遺稿) とも言ふか) はカント八十歳時代、没前數年間の最後の思索の跡を示すものであるが、こゝでカントは自己の門下や同時代人の問題として居る自己の説に、注意を集中し、新しい考を考案して居るやうである。第一に、上述の如き二重觸發によつてのみ「觀念論論駁」の擁護されることを認めて居ると稱せられる。

(カントの Opus postumum は既にライプツク(Reiche)が公にしたが (Altpreussische Monatschrift 1882—84) アーティックスが脱逸や日附を完成して世に送つたものである。(Adickes, Opus postumum, dargestellt und beurteilt 1920) 自分は之を手に入れ得ないので、スキムスの Commentary の附録の簡單な復讐をやつて居るに過ぎないことを御断りしておく。

純粹理性批判中では、感覺の原因を物自體とした個所と、物理的刺戟とした個所と

があることは既に述べた通りである。之はバークリーに對する反對と、物理學、生理學に支援せられた經驗的事實とに基くのであるが、カントが此の間を明かにしなかつたことが、誤解の原因である。「自然科學の形而上學的基礎」でもカントは物質を構成する力が如何なる段階の實在性を有するかに答へて居ない。カントは *Opus Post-umum* で、此等の自然科學と先驗的觀念論との間に介在する難點をば論究の主題として居る。

カントによれば凡ての自發性の究極の原因は物自體の中にある。我自體に關しては、此の自發性は空間時間範疇等の特有な形式の產出となつて現はれる。此等の形式による綜合的活動により、我は現象界を定立する。物自體も同様に自發性の源泉である。それは我自體を觸發して質料を生せしめる。此の場合どの程度まで、主觀的契機が働くかに關しては、カントは二つの見解の間を浮動して居り、何れとも決定してゐない。或る時は物自體の內的な無時間的な關係は、我により、空間時間中に置き換へられる、と云ふ風に考へられて居る。即ち物自體は因果的力學的な力の源泉と考へられるのであり、之を我々は範疇によつて物理的存在者に歸屬せしめるのである。之によれば「自然科學の形而上學的基礎」に於ける物質を構成する力が、どの

程度の實在性を有するか分る。而して經驗的我は超驗的我から獨立な第二の存在でなく、それは依然、その反面である我自體の根本特質としての自發性を保有して居る如く、經驗的客觀も亦相互にかゝる力を反映して相互作用に立つて居る。又他の場合(此の方が普通である)には、物自體は影を潛めて居る。共存、繼超などは不可知な物自體に規定せられるやうであるが、その他の點では物理的自然の體系は超驗的私の屬性たる機制、その自己規定的要求により規定せられると考へられて居る。此の後の立場によると、經驗的我と物理的實體とは、空間中に於て、力學的相互關係に立つて居るので、言はゞ兩者は平等に取扱はれて居る。即ち兩者は同様な相對的な獨立的存在、及び變化を發動しうる同一能力を有する。此の點は前の場合と變りはない。然るに之を形而上學的に觀るときは、經驗的我は超驗的私の代表者と見做され、その綜合的機能により、與へられた感覺的多様から經驗的世界を構成するが、之に反し、物理的實體の凡ての根本的特性は、その純形式的なるものに至るまで、我自體に由來するので、物自體を否定するフイヒテの立場に近いと言へる。(cf. Smith, A Commentary to Kant's Critique of Pure Reason, S. 613 ff.)

併し物自體の問題は之で解決したのではない。既にヤコービが指摘した如く、範疇を超越的に使用するのはカントの説と矛盾する致命的背理でなからうか。此の點に關しては、アーディツクス等は樂觀的見解を懷いて居る。かゝる現象はカント直後の状態と大部趣を異にするが、之は一面新カント派のカント解釋に對する反動であると共に、又カントの思想が全體的に理解せられるやうになつたのに基くとも考へられる。アーディツクスによれば、範疇を物自體に適用したのは矛盾である、この非難は思惟と認識との區別を明かにすれば消滅するもので、此の事からカントを攻撃するのは當らないと言ふ。(Adickes, Kant und das Ding an sich S. 49 ff.) 既にヘルドマンはカントが感覺の原因とし物自體を考へた時は因果範疇ではなく、自由の理念を考へてゐたとし、範疇に關するカントの矛盾を救はんとしたが、(B. Erdmann, Kants Kritizismus S. 14 ff.) 併し自由による因果性は畢竟因果範疇の特殊な形式であるから、物自體と範疇との問題は之によつては解決せられない。カントも注意した如く、認識は概念と直觀との結合によつて成立するものであるが、カントが先驗的分析論で説くところは自然科学的認識の制約を確立することで、思惟にはかゝる制限がない。直觀を缺いた範疇だけでは物自體の認識を得ることは出來ないのは勿論であるが、

併し我々は範疇により、物自體をば思惟し得るのである。此の點に關して、アーデイッケスは範疇の意義を二分して居る。第一に、範疇は先驗的統覺の綜合的機能に對する概念的表現であり、第二には、範疇は思惟機能として、純粹悟性に起原を有し、客觀一般に妥當するところの先天的に與へられた概念である。第一の意味の範疇は圖式の時間規定の結果とし、嚴密に現象界に限られるものであるが、第二の意味の純粹な範疇は凡て實在一般に適用しうるのである。第一の意義の範疇をば超越者に適用するのは、絕對的に無意義である。又第二の意義の範疇をば直觀を缺除するのには、經驗的實在論に於けるが如き客觀的妥當性を得るために使用するのには相對的に無意義である。カントが範疇を超越者に適用することの相對的無意義性をば、屢絶對的無意義性まで高めて居るのは、古い形而上學に抗爭するためである、とアーデイッケスは言ふ。既にパウルゼンも、カントは實體、因果性、數多性等の範疇を超越的に使用した、との非難を回避するためには、純粹に論理的、超驗的と、先驗的、物理的との二重の意義を範疇に認めねばならぬと言つて居る。(Paulsen, Kant S. 165) 又我々はニコライ・ハルトマンが物自體の解釋について言ふところをも參考することも出来る。ハルトマンによれば、凡ての思惟は、自らは思惟でなく、却つて思惟の外にあるところの

或るものゝ思惟である。超越者の思想そのものは勿論内在的に止るが、併し思想によつて或る超越者が考へられて居ると云ふことは之が爲めに何等損はれるものではない。その規定性が意識に隠されて居るところのもので、雖も、我々は之を志向することが出来るのである。(cf. Nicolai Hartmann, Grundzüge einer Metaphysik der Erkenntnis S. 183 f.) 然るに、範疇を一義的に解して居るユーベルウエヒの哲學史では、範疇を物自體に適用することは分析論の立場ではなく、先驗的感性論の立場を放棄することになると言つて居る。即ち時間の觀念性と云ふことが悟性使用を可能的經驗に制限する前提であつたのに、今や時間直觀が超驗的に定立されることになると言ふのである。(Ueberweg, Grundriss der Geschichte der Philosophie III. S. 499) 之は面白い考であるが、範疇の一面的解釋に過ぎない。

兎に角物自體と範疇との問題を理論的整合的に解釋しようとするれば、アーデイック等スの如く、範疇に二義を分つことが必要となる。カント自身、一七七〇年の就職論文では「悟性使用は二重である」として悟性の超驗的使用を公然認めたのである。然るに「先驗的分析論」では認識なる概念を嚴密に規定した結果、悟性使用は當然内在的となつたのである。併し思惟と認識との區別によつて物自體が肯定せられて居

るのは疑問の餘地がない。唯、範疇の解釋が固定せられて居るやうに見えることからして、種々の難點が指摘せられるが、カント自身此の點を明確に意識して居る。即ち自ら認める「批判の謎」をば、第二批判で範疇の理論的使用と實踐的使用とを分つことにより、解いて居る。アーデイツケスは範疇の内在的使用と超驗的使用とを第一批判の立場から理論的に基礎づけんとして居るが、之はカントの言はなかつた點を明にした功績はあるが、基礎づけとしては消極的であり、歴史的に見てもカント自身に不忠實であると言はねばならない。我々は此の缺陷をばカント自身の所説により補はんとするのであるが、此の事を考へる前にカントに於ける物自體の由來を知る要があると思ふ。何者、物自體が如何に實在論的に解釋せられようとも、結局それは多くの人が言ふ如く「絶對自明な假定」、「根本要請」に歸著する。併しかゝる假定、要請に具體的な光をば、可及的に、投ずるのが歴史家の任務である。

我々はこれ迄、物自體と觸發との問題解釋をば、歴史的に考察し、之をカント直後から現代に及ぼした。而して最後に、物自體の實在論的解釋が動かすべからざる歴史的事實なることを文獻學的に明かにし、同時に之を整合的に基礎づけんとする種々の試圖にも注意した。併し何故カントは物自體を假定し、のみならず又物自體によ

る觸發即ち超驗的觸發を説いたのであるか。此等に關し、多くの人の如く、唯證明すべからざる根本假定、體験或は根原的要請とする以上に具體的理解を得たいと思ふ。此の疑問や好奇心が我々を驅つて先批判期に溯行せしめ、その由來を詮索せしめる。

(併しカント自身は「私の此の著書(純粹理性批判)により私の以前の書は完全に否定せられる。」と稱したし、又全集刊行の際テイーフトルンク(Tielhunk)に一七七〇年の就職論文以前のもは入れてくれるな、と書いてやつた位であるから、(Kants Werke (Academie) I. S.)かゝる企てはカント自身にさり迷惑なことであり、無意味なことであるかも知れない。又此の論述に引用した全集はアカデミー版であり、ラテン文はフィッソーフィシエ・ビアリオテーク版を参照した。

我々は、カントが哲學界に乗り出さんとした當時の一般的状态の詳細に亘ることは、此處では許されないが、此の間の消息を局部的に知つて置く要がある。

概觀的にはフィッシャー、ニーベルウエヒ、フアルケンベルク等の哲學史が役立つであらう。

啓蒙期の先驅ウォルフは彼の重大なる時代の功績にも拘らず、ライプニッツ自身よりすれば自己を理解守成した人とは言はれない。ウォルフによりライプニッツのモナッド説の眞生命は没却せられると共に、新二元論が復活せられ、デカルトに還つて物心は對立するに至つた。勿論、デカルトに於ける如く物體をば凡て延長の單なる變容とし、物質を全然受動的なるものとしたのでないことは、能動的な力體を物質の單位としたことから明かである。ライプニッツはモナッドとその發展概念

とにより、物心の二元的對立を克服したが、ウォルフは精神に對立するものとして物質的な併し非延長的な力體を導入し、物質構成の要素をばモナッドと言はないで單純體 (einfache Dinge 又は *Atomi naturae*) と稱して居る。而して此の單純體は相互に全然性質と力を異にすることはライブニッツのモナッドに似て居るが、その有する力は表象力とは異つた力であるとして、表象力を特質とする單純的な精神と對立せしめたのである。同時に、かゝる形而上學的點としての物質的單純體から派生的不連續的空間を説いた。(Poppovich, *Die Lehre von diskreten Raum in der neueren Philosophie* S. 30) 之と共に所謂ライブニッツの豫定調和は物心間の關係に關する單なる假定と墮し、本來の面目を失ふに至つた。かく皮相にモナッド説を解したことがウォルフ哲學を内部的に崩壊せしめる一因となつたのは當然である。傳來の合理主義と英吉利的經驗論佛蘭西的唯物論との接觸により釀成せられた十八世紀の折衷主義が之を見逃す筈がない。正統派中自由派の急先鋒、クヌッツェン (Martin Knutzen) がかゝる不安定無意義な豫定調和に代へるのに、實證的な物理的作用 (*influxus physicus*) を以てしたのは怪しむに足りない。ウォルフ自身は豫定調和をば宇宙論から排斥したのであるが、クヌッツェンはニュートンの示唆の下に物一般の自然的相互作用をば

998
 物心間にも徹底したのである。

カントは自己の師クヌツェンの考を承けて之を發展せしめ、既に處女作である一七四六年の「活力の眞の評價に關する思想」(Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte)に於て、表象の起原をば物心間の物理的作用により説明して居る。併しウォルフ自身も物理的作用或は自然的作用をば全然考慮しなかつたわけではない。ウォルフは「物體の力は精神の中に思想を生じうるか、又精神の力は身體に於ける運動を起しうるか」。この設問に關し、所謂自然的作用の合理的根據なきことを主張して居る。即ち精神と身體との作用は全く相背馳したものとし、ライブニツツの豫定調和を擁護して居る。ウォルフによれば精神は自ら世界を表象する固有の力を有する。(Wolff, Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen § 761.)「精神は自ら變化をなし、同様に又物體も自ら變化を生ずるものであり、精神が身體に、又身體が精神に作用することもなければ、或は又神がその直接的作用により、かゝる事をするのでもない。唯精神の感覺と欲求とが身體の變化及び運動と一致するだけである」。(ibid. § 765) 精神の側に於ける感覺は身體の側に於ける外官が觸發されるときに存する。換言すれば精神に於ける感覺は感官に變化が生じた瞬間に生ずる。故に感

官に故障がある盲目や聾には感覺が生じないのである。かくてウォルフは精神の外なる世界の現實的存在を否定する觀念論を攻撃して居る。(ibid. §76) ヴァインデルバントは感性の受容性と悟性の自發性とを對立せしめるのは心理主義であり、又素朴的實在論を豫想すると言つたが、(Windelband, Über die verschiedenen Phasen der kantischen Lehre von Ding an sich, Vierteljahr. f. wiss. Phil u. Soz. I. S. 239, 259) その當否は別としカントに於てそれは如何なる由來を有し居るか、以下少し具體的に展開して見たい。物體物質が精神の外に獨立した全然異質的な存在と見られる限り、物心間の溝渠は不可避的である。カントはライブニッツやウォルフに對し自由な態度を標榜するものであるが、モナッド論的二元論とも言ふべきウォルフ流のモナッド説をクヌッツェンに共鳴して更に變容せんとする。カントの言ふ如く、如何にして物質が人間の精神中に實際活動的な仕方(即ち物理的作用により)表象を生せしめうるか、と云ふことを考へるのは形而上學に於ては困難である。一體物質は運動を生せしめること以外のことを爲しうるであらうか。「それはせいゝ精神をばその場所から押し出す位のものであらう。單に運動のみを生せしめる力が表象や觀念を生せしめると云ふことは如何にして可能であらうか」。(W. I. S. 20) カントによれば精神と物體、

物質との關係は豫定調和によつては説明されない。これには物理的作用を假定する必要がある。而して物質がかくの如く精神に物理的作用を及ぼすのは、物質がライブニッツの言ふ活動力 (*vis activa*) を有するからである、とカントは言ふ。さて、カントによれば、物體、物質はそれと空間上結合せられて居る凡てのものに作用する。従つて精神にも作用し、その内的狀態を變せしめる。「物質は精神の内的狀態をば、それが外的なるものに關係して居る限り、變化せしめる。さて精神の全内的狀態はその表象と概念との總括に外ならない。而して此の内的狀態が外的なるものに關係して居る限り、それは宇宙の表象狀態と稱する」。(W. I S. 21)

カントの此時代の空間論は別個の題目をなすもので、此處に述べる餘地はない。唯ウォオルフ流の派生的不連続的空間をばニュートン力学の影響によつて變容して居ることを附記する。又カントの先批判期に觸れた敘述には誤謬が多い。例へばカントの空間論を述べた Riehl (*Philosophischer Kriticismus* I S. 332) 及び Kuno Fischer (*Geschichte der neueren Philosophie* IV S. 321) カントの感性を論じた Kuberka (*Kants Lehre der Sinnlichkeit*)。

同じく活力を有する精神は、或る場所を占め、自己の外に存する他の存在者、物體に作用し、之を變化せしめる。即ちカントによれば、精神と、物體、身體等を構成する物質的な單純な實體とは空間に於て相互作用に立つて居るのである。茲に我々の氣づくことであるが、近世哲學に於て重大な意義を有する實體なる概念はライブニッツ

により大變革を受けたが、ゾォルフを経てカントに至つては全然本來の面目を失つて居る。カントの言ふ實體はその集合により空間を生せしめるところの超空間的活動的な力點と考へられる外はアトムと殆んど異らない存在の究極的單位である。それ等は力學的な相互作用により集合して延長、物體を生ずるのみならず、又力學的に精神と結合するものである。精神と雖も內的性質を異にするのみで、存在の仕方
は物質的實體と異ならない一種の單純實體である。カントは「此の世界の實體」はその結合に際し、距離の自乗に反比例して作用するものとなし、之を物質構成の要素たる單純實體の間のみならず、廣く物心の關係にも及ぼして居る。「我々の精神は常に距離の自乗に反比例して外部から印象を受容するが、精神はかゝる風に作用されるのみならず、又かゝる風に外部に作用する」(W. I. S. 24) 即ちカントはニュートンの引力法則をば利用して物心の關係をば積極的力學的に規定したのである。又カントは此の引力をば神に創造せられた最根源的な自然法則であると考へて居る。とまれ、物理的世界像に於て物體間を規定する力の概念をば、そのまゝ形而上學的な問題に流用したのは、如何にカントが當時時代及び彼の師の影響とは言へ、一面に於て實證主義的であつたかゝ窺はれる。

カント三十二歳の講師求職論文であり、同時にカント最初の形而上學書である一七五五年の「形而上學的認識の第一原理新譯」[Principiorum primorum cognitionis metaphysicæ nova dilucidatio]でも同様な思想をば、より精細な姿に於て述べて居る。カントはライプニッツのモナッドの如く全然他と獨立なる實體には變化はありえないとして、豫定調和に反對して居る。周知の如くライプニッツは「モナッドは、それを通じて何かに入つたり、出たりしうるやうな窓を一つも有しない」。[Janet, Oeuvres philosophiques de Leibniz I, p. 708]と稱し表象力の自發性を主張したのであるが、カントは以下述べるやうな理由からして之に反對する。而してカントが實體の相互的依屬性の證明理由をば變化なる矛盾概念の論理的分析により求めたのは此の個處のみで、一七七〇年の就職論文でも實體の相互的依屬性を説いて居るが證明せられてゐない。かくの如く第一批判に至る迄カントが表象の原因をば、終始精神外の實在的なものに歸して居る事實は物自體の實在論的解釋をば歴史的に基礎づけるものと考へる。又その證明の理論的に不安定であつたことはカント自身意識して居たので、此の點は理論を超越した信念によつて表象とは獨立な物自體の實在を説いたヤコービの方が徹底して居る。

當該個所は命題十二の「實體は唯それが他の實體と結合されて居る限り變化を有しうる。かくて其等實體の相互的依屬性 (dependentia reciproca) は實體の狀態の交互的變化 (mutuam status mutationem) を規定する」に表はされて居る。(W. I. S. 410) カントは之に三様の證明を與へて居る。之を文字通りに示すと次の如くなる。

一、單純實體 (substantia simplex) が全然他と獨立なりと假定する。實體に屬する内的規定は凡て、反對を排除した内的原因によつて定立せられる故、若し他の規定が繼起する場合には、他の原因が求められねばならない。然るに内的規定にはその反對が含まれて居るが故に、而かも假説により、外的原因が加はるべくもないから、件んの他の規定は許されない。

二、規定根據 (ratio determinans) に従ひ定立されるところの凡ては、此の規定根據と同時に定立せられねばならないことは自明である。故に單純實體の狀態を規定するところの凡ては、それにより規定せられたところのものを必然に伴ふ。併し變化は規定の結果、即ち以前に存しなかつたところの規定が生ずる場合であり、従つて、ものが反對の規定に規定せられる場合であるが故に、これは内的に實體中に含まれたところのものから導出することは出来ない。故に變化が生ずるならば、それは外的結

合に基かねばならない。

三、或る與へられた制約の下に變化が生ずると假定せよ。變化は變化が以前になつたのに、即ち實體が反對に規定せられてゐたのに、存在し始めるのであるから、而して此の場合内的規定の外に、何ものも來らないと云ふことが假定せられて居るのであるから、實體は、それにより實體が一定状態にあるところと、同じ原因により反對に規定せられることになり、矛盾である。

此等三つの證明が與へられて居るが、要するにカントによれば實體の状態の變化には規定根據律(*principium rationis determinantis*)により、原因即ちカントの所謂先行的規定根據(*ratio antecedenter determinans*)を要する。而して原因は結果に先だち存するものであるのに、或るものがその變化の原因を自らの中に有すると言ふのは、或るものが原因であり、同時に結果であると云ふことになり、同一律(*principium identitatis*)により不合理である。故に原因を實體の外に求めない限り、實體は變化しないと云ふのである。既に述べたことであるが、近世哲學以來の實體概念は明かに顛倒せられて居る。カントは言ふ「故に凡ゆる外的結合から自由獨立な單純實體はそれ自身に於ては全然不變である」。(W.I.S. 419)カントの推薦によれば、かゝる假定によつてのみ「健全な

哲學」(Sanior philosophia)が觀念論者に對し、唯蓋然的にしか擔保しえなかつた物體の現實的存在をば保證しうるのである。(W. I. S. 411)此の觀念論に反對するところは、ウオルフと全然同じである。又注意すべきは、實體の相互的依屬性を規定するには、單に實體の存在そのものに求められた物理的作用だけでは形而上學的に基礎が薄弱とし、有限的實體は其等の單なる存在の故を以て相互關係に立つものではなく、其等が存在の普遍的原理即ち神的悟性により、相互的關係に置かれることによつてのみ結合するのである、と述べて居る。此の考は一七七〇年の就職論文でも維持せられて居る。又カントは此處に於て既に觀念論者に眞正面から反對して居るが、一七七〇年でも、現象は觀念論とは反對な對象の現在の結果であると言つて居る。此等の言説は如何にカントに於て實在論的契機が強いかを語るものである。第一批判の初版では、カントは觀念論者をば「人間悟性の恩人」(A. D. 370)と稱揚して居るが、これは認識論討究の過渡段階に於て、あつて、觀念論者を排斥することは依然で、殊にガルフエーフエダーの批評以來自己を區別するに急なる餘り、惡口を言つて居るのは周知のことである。

カントは更に物心の關係をば具體的に規定して次の如く述べて居る。「若し精神

どの關係により、精神に自己に對應するところの表象を與へる物體が現實に存在しないならば、我々は何等かゝる物體の種々に可限定的な表象(representationem varie determinabilem)を有しえないが故に、此のことからして容易に人は、我々が自己の身體と稱するところの複合體が存在することを推測しうる。勿論、單に自己の身體のみではない。既にカントが證明したと考へる如く、人間精神は外物との結合を絶たれるとき、その内的狀態を全然變じえないものである故、逆に精神に於ける變化はそれと相互的結合にある精神外の物の實在への指標である。「人間精神は解くべからざる繫縛を以て、その内的な精神機能の遂行に際し、かゝる仕方で物質と結びつけられて居ると云ふこと(之は唯物論者の破壊的見解と相去ること遠からざるが如く見える)のために、上述の原理は疑問に思はれるであらう。併しながら私は、若し精神が全くその外的關係から離るゝときは、その表象狀態(Status representationum)は不變的永續的に自己同一であると主張しても、之を以て精神から表象狀態を奪はうとするものではない」(W. I. S. 421)

かくの如くカントは豫め期して居た唯物論的誤解をば自ら防止して居るが、之もカントに於ては、常に嚴密な理論的要求と熱烈な實踐的要求とが並行して居る證據

である。カントが變化なる矛盾的現象の論理的分析からして、實體の相互的依屬性を演繹し、精神に於ける表象の自發性を唯物論的に否定して居るのは、カント自身が認めて居る哲學的反省の未熟さとその實證主義の結果である。實體を二種に分つて置きながら、其等の關係をば引力法則によつて考へたのは早計である。此の點では、精神の欲求と意志とは神經や腦髓及び此等の中に含まれた流動的な物質を介して實現されるが、その間に直接的作用があるのではないとしたウォルフの方が、より反省的であると言へる。(Gedanken von Gott § 815) 變化なる概念に存する矛盾性と精神の自發性とは實體概念に於て兩立することが可能であり、變化の論理的矛盾性から直ちに精神の自發性を否定することは出来ない。此の後かゝる證明を企てゝゐないことは、カントの實在論の弱味と言へないことはないが、超越的存在による觸發は體驗、信念の形で批判期迄も持越されて居ることは争ふべからざる事實と考へる。要するに物自體(非物質的ではあるが)による觸發と云ふ躓きの石は既に此處に置かれて居る。又カントが物質的實體と精神的實體とに關し、人を五里霧中に彷徨せしむるまでに一般論をやつて居ることも分る。此の清算はカント自身一七六六年の「視靈者の夢」で行はねばならなかつたことは後に判明する。ウォルフもカントと共

にライブニッツのモナド説を畸形化したとは言へ、ウォルフは物と心とを直接交渉のない本質的に異なる二種の實體としたが、カントに於ては精神的實體と物質的實體とは、前者が表象力を有し、後者が全然之を缺く以外は、共に空間的場所を有して、物理的力學的關係に於て結合して居る。

上來述べ來つた如く、精神活動は物質と力學的に結合してのみ可能であるが、他方我々の世界の物質は精神の活動を妨害するものとされて居る。即ち、より良き環境では、より高等なる活動をなしうるのである。此の事は物心の峻別による精神の特殊なる運命と關聯し、靈魂流轉説の形に於て、同年の「一般自然史及び天體論」[Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels] で、詩的、宗教的想像力を以て描かれて居る。「あゝ幸なるかな。精神は要素の騷擾と自然の潰廢に常に高踏し、世界の事物に無常を齎らす破壊をば遙か、言はゞ足下に雲煙過眼視するとは、……さればこそ、我々をば被造物の虚無に繫縛する桎梏が我々の輪廻に定められた瞬間に截斷されるとき、有限物の羈絆を離脱した不滅の精神は無限的存在者との交通に於て眞の淨福を享受する」。(W. I. S. 324) これから觀ると、物質は精神の桎梏であり、肉體は靈魂の牢獄である。上の引用は人間のプラトンの墮落を述べて居る一種の厭世觀と見られる。茲

に於てか、カントが「Nova dilucidatio」で、唯物論的誤解を排撃したる理由も分明である。又カントによれば我々の世界の粗笨な物質が高等な精神活動を妨害し、我々を情慾に引きづり込むのである。「此の思考力の鈍重は粗笨不活潑な物質に依屬する結果であるが、これが又煩累の淵源のみならず、又誤謬の淵源である」(W. I. S. 375) 即ちカントによれば、精神は本來自由純粹であり、唯物質と結合してのみ曇りを生ずるのである。各人の精神は本來平等清淨であり、唯肉體が一切不平等、罪惡の原因であることになる。併し我々は更に、かゝる精神が何故高等下等種々なる肉體と結合するに至つたかを問はねばならない。さて、何故我々の世界の物質は粗笨であるのか。カントはこれを引力の強さに正比例した物質の密度から説明する。物質は引力中心の太陽から遠ざかるに従ひ、次第に微細輕快になり、同時に精神の活動は益、自由且つ完全になる。此等の叙述は或は倦怠を感ずるかも知れないが、カントに於ける理論的要求と實踐的要求との並行を知るのに是非必要であり、又これがカントの思想を理解するのに不可缺の前提である。

以上は處女作以來、カントが合理論に立脚して經驗論の攝取に向ひつゝあつた時代に屬するが、カントの思想は一七六〇年代初頭から遽に經驗論的色彩を鮮明にし

て來た。カントが存在問題に關し、獨斷論を捨て、思惟と存在との區別を洞察したことが彼の思索に新しい展望を與へた。

クルジウスの影響は既に前からあつたが、ヒュームの影響は此の時代頃から始つて居ると考へられる。一七六二年の「神の存在證明に對する唯一可能的證據」Der einzig mögliche Beweisgrund zu einer Demonstration des Daseins Gottes) に於てカントが稱する如く「存在は全く何ものかの賓辭又は限定ではない」。(W. II. S. 72)或は「存在は物の絶對的定立である」。(W. II. S. 73)かくて思想の實體化を排せる結果カントの思索は著實且つ地味になり、従來の如き思辨的形而上學を避けて居る。經驗的見地からして、我々の意識の事實として精神の存在を承認して居るが、これを直ちに實體視することに反對して居る。同年末伯林學士院の懸賞に應ずるため、倉皇の間に脱稿した「自然神學及び道德の原則の判明性に關する攻究」Untersuchung über die Deutlichkeit der natürlichen Theologie und Moral) は又此の間の消息を語つて居る。「哲學に於ては證明せらるべき事柄の概念が與へられて居るが、此の事柄の中に直接且つ最初に知覺されるところの事實は證明すべからざる根本判斷に役立つものである」。(W. II. S. 281)カントによれば哲學は、數學の構成的綜合的方法に對し、分析的方法に遵ふべきもので

あり、與へられた概念をば分析して其の標徴を規定するのが本來の職分である。これにより將來ありうべき綜合的構成に對し確實な基礎を得るのである。若し始から綜合的方法を採れば獨斷的形而上學に陥る。併しながら、哲學者は理性能力を具へる實體を考へ、之を精神と呼ぶではないかとの反問に對しカントは答へる。「かゝる語義の規定は決して哲學的定義ではない。假令、それが説明と言はれるにしても、それは單に文法的説明に過ぎない」。(W. II S. 277)かくてカントはライブニッツのモナッドは彼に與へられたものでなく、案出されたものに過ぎないとい蹴して居る。精神の實體視をばかくの如くにして排して居るが、物體が非延長的な單純要素から成るとの考は依然として維持して居る。「外なる多くのものに對する不可入性なる力が要素が空間を占有することの原因であるが故に、此の力からして要素の外的作用に於て數多性が生ずるであらうが、内的部分に關しては數多性は生じない。従つて物體に於ける要素が他との結合に於て空間を占有するからとて、要素は延長を有すると言ふことは出來ない」。(W. II S. 287)併し此のことは何もカントが唯物論を採つて居ることを示すものではない。かゝる物理學的世界像に於て精神を考へ、以前に於ける如く精神的實體と物質的實體とを空間中に同居せしめるこそ、却つて危險

である。

かくの如く、カントは精神を實體視することに反対し、不可知論的態度を持して居るが、之は一七六六年の「形而上學の夢により解明せられた視靈者の夢」(Träume eines Geistessehers, erläutert durch Träume der Metaphysik)に極まつて居る。併しカントは全然實體視を排したわけではなく、唯それに伴ふ難點を強調するのである。即ちカントは從來の如く、空間關係に於て物心の關係を考へた當然の結果とし、實體を二種に區別するに、至らざるを得なかつた。カントは論ずる、今假りに一立方尺の空間をこる。而して此の空間を充實する何物かゝあるとする。即ち他のものゝ貫入に抵抗する或るものがあるとする。誰もかゝる仕方では空間中に在るものをば精神的とは言はないであらう。併し我々が單純な存在者を考へ、同時にこれに理性を附與したとする。然る場合にはそれは心靈なる言葉の意義を充足するであらうか。否。我々はかゝる單純な存在者に内性として理性を認めうるとしても、今此處で問題として居るのは其外的關係の考察である。今これを物質で充滿して居る一立方尺の空間中に置かんとする場合、物質は此の單純者の爲めに場所を空けねばならないだらうか。即ちそれは不可入的な空間を占有するであらうか。「併しながら、かゝる實體は、假令

理性を具有して居ても、外的には物質の要素と全く區別される事は出来ない。此等物質の要素に於て、我々は唯此等の外的な現在の力のみを知るので、此等の内性に何が屬するかは全く知らない。(W. II S. 321) かゝる類の單純的實體は精神的存在者とは言はれない。「故に諸君が物質に充たされたところの空間に現在しうるやうな存在者即ち不可入性なる力を具有せず、而して其等是如何に多く結合しても決して填充的全體を形成しないところの存在者を考へるときにのみ、諸君は心靈なる概念をば維持しうるであらう。かゝる類の單純的存在者は非物質的存在者と言はれる。若しそれが理性を具ふるならば、心靈と言はれる。併し其等の結合が不可入的延長的全體を生ずるところの單純的實體は物質的單位と言はれ、其等の全體は物質と稱せられる」。従つて心靈なる名稱は全く無意味か、それともそれは上述の如き意味のものでなければならぬ、とカントは言ふ。「人は論破される憂なしに非物質的存在者の可能性をば想定しうるが、併し此の可能性をば理論からして證明しうる望もない。かゝる精神的被造物は空間中に現在するにしても、其等はそのれにも拘らず常に物體なるものに對し可入的である。何者、かゝる被造物の現在は空間中に於ける作用性であり、空間の充實ではないから。即ち其等は填充性の原因としての抵抗を有

しないから』。(W. II S. 323) 大體人間の心靈が上述の如き精神と確定したとする。では、かゝる人間の精神の場所は物體界の何處に存するのか。その變化が私の變化であるところの身體である。此の身體は私の身體であり、身體の場所は同時に私の場所である。然らば私の場所(精神の場所)は此の身體の何處にあるのか。精神は全身至る部分に亘つて存在して居ると言ふものがあれば、又精神は腦髓の一局部にありと考へるのもある。「私は告白する。世界に於ける非物質的被造物の存在を主張し、私の精神自體をばかゝる存在階級に置きたいのは山々である。併し此の場合には、心靈と身體との交渉は如何に神祕的となるであらう」。(W. II S. 327) 結局、此の問題は「解かうと切らうとが各人の勝手であるところの錯雜した形而上學的結節である」。(W. II S. 319) と言ふことに歸着する。「私は形而上學に惚れ込まざるをえない宿命にある。尤も彼の女の好意表示については殆んど誇りえないが」。(W. II S. 367) と冗談に紛らしたカントの語は彼の衷情發露ではあるまいか。とまれ、空間が客觀的實在である以上、在るものは凡て空間中にあらねばならぬ。空間中にもそれは存在しないといふことになれば、存在すると信せられるものが空間中に求められるのは自然である。其處に感覺の夢がある、形而上學の夢がある、視靈者の夢があ

る。併し空間は有限的存在者の主観的な直観形式に過ぎないとすれば、かゝる直観形式に入らない實在は當然認識の對象でなくなる。併し認識の對象でない、と云ふことは存在しないと云ふことではない。換言すれば、空間の客観的實在性が歿落すると共に、超感性的世界の可認識性ではないが新しい考究の道が残されて居る。元來、神、自由、不死は人間性に根ざした理念であり、カントの如き實踐的良心の敏感な人が之を無視しうる筈がない。此處にも批判的轉向を醸成促進すべき契機が潛んで居る。屢、引用されることであるが、カントは覺書で「六九年は私に大なる光を與へた」と稱して居る如く、(B. Erdmann, Reflexionen Kants zur kritischen Philosophie II) 彼は此の實踐的要求をば一七七〇年の就職論文で解決し得たのである。

一七六〇年來、カントは經驗論的立場からして形而上學の理論的可能性を否定し、自己の從來の見解をも捨てざるを得なかつた。此の間の推移は此の簡單なる叙述中にも多少觸れたのであるが、此の傾向は「Traume」に極まつて居る。併し一七七〇年の批判的新洞見により感性的認識と悟性的認識とが原理的に區別せられ、前者の制約と共に後者の權利根拠が發見せられた爲め、再び合理論が復活せられ一七六〇年以前に立返つた貌を呈した。從來、空間及び時間はそれが、合理論期に於ける如く、

派生的二次的と考へられるにしても、經驗論期に於ける如く、根原的絶對的と考へられるにしても、何れも可能的實體及び状態の必然的現實的な存在形式とせられてゐたが、此の一七七〇年の「感性界及び悟性界の形式と原理について」(De mundi sensibilis aequi intelligibilis forma et principis) に於て、始めて先驗的感性論の根本思想が確立せられ、空間時間は單なる主觀の感性形式に過ぎないことが主張せられた。カントによれば對象はその形式により感能を觸發するのではない。故に感能を觸發する對象の多様が表象の全體に結合せられる爲めには精神の内的原理を要する。かくて始めてかゝる多様は確實な生得法則により或る形態を得るのである。(W. II S. 393)

此の空間時間の觀念性、主觀性と共に實體内の關係は超空間的超時間的とせられたが、實體の相互的依屬性を説くことは「Nova dilucidatio」と變らない。カントは其處に於けると同様に物理的作用(influxus physicus)を批評して、それが單なる實體の存在から演繹されるところのは根本誤謬であると言つて居る。(W. II S. 407) カントによれば世界は偶然的實體から成る。何者、實體の相互作用(即ち實體の相互的依屬性) commercium substantiarum (h. e. dependentiam statum reciprocam) と云ふことは實體の必然性と矛盾するから』。(W. II S. 408) 併しカントは何故世界はライブニッツの言ふや

うな必然的實體から成らないかを證明してゐない。唯相互的依屬性と云ふことを要請して所謂必然的實體を排して居るに過ぎない。

此の就職論文では、從來の形の物心の相互作用、正確に言へば物質的實體と精神的實體との空間的相互作用は空間の觀念性と共に消失したが、カントが神を介した實體の相互的依屬性を説いて居ることは既に述べた。現實的世界は現象として單なる私の表象であるが、表象の起源に關し我々の注意すべきことは、カントは此處では超驗的觸發を前提して居ることである。カントが對象 (Objecta)、物 (res) と言ふ場合、内容と原因とを區別するとき、カントは第一批判で問題となるやうな二重觸發を説いてゐないことが分る。カントが「感性とはその表象状態が對象の現在により、或る仕方で觸發せられる (certo modo afficiatur) ことを可能ならしめる主觀の受容性である。」(W. II S. 392) と言ふ場合は單なる定義として對象を不問に附してもよい。次にカントが「感性の對象は可感的である」と言つた時の對象は原因としての對象ではなく、内容としての對象である。又「感性的表象の素材を成す感覺は或る可感的なるものゝ現在を證明するが、主觀が對象により規定される限り、その性質上感覺は主觀の性質に依存する。」(Ibid. S. 393) と言ふ場合の、可感的なるものとは内容を指すので原

因を指すのではない。次に對象と言ふ時、カントが後に感性的表象の素材は感覺で、形式は空間であることを説くのを豫想すれば、所謂對象は超越的對象であることが分る。更に「現象は觀念論と背馳するところの對象の現存 (praesentia obiecti, quod contra idealismum) の結果である。」(ibid. S. 397)と言ふときの對象も、矢張り超越的對象を指すのであり、觀念論に反對し、實在論を擁護して居るのは「Nova diuicidatio」と同断である。此等の場合、カント自身に幾分曖昧な點もあるが、第一批判で問題になる二重觸發を引張り出すのは徒に理路を紛糾せしめるのみであると考へる。カントによれば、感性的表象は個々の主觀により異なるもので、その素材は感覺であり、それは物をば、その現はれる相に於て與へる。之に反し、悟性概念は物をばそれが在る相に於て與へる。(ibid. S. 392)即ち感性的認識の對象は現象 (phaenomenon) であり、悟性認識の對象は本體 (noumenon) である。勿論悟性認識は直觀ではなく象徴的認識 (cognitio symbolica) に過ぎない。(ibid. S. 397)又「我々の精神の直觀は常に受動的である。故に何物か、我々を觸發する限りに於てのみそれは可能である。」と言ふ如く、悟性の自發性に對し、感性的受容性はカントの根本確信である。

要するに實體の場所は超感的、超空間的である。アンチノミーは感性的認識と悟

性的認識とを區別することにより解決しようとカントは考へる。「凡て在るものは何れかの處、何れかの時に於てある。」と考へるから、神は空間的時間的に宇宙に現在し、又非物質的實體は物體中に在らねばならぬ事になり、精神は身體の何處かに存在せねばならない。かくて空間に於ける神の遍在と、時間に於ける神の全知、又精神の場所性等に關し、悟性概念と感性的概念との混淆からして、四角な圓が圓いか四角か、と同様な空虚な論争が惹起せられ、「一人は牡羊を搾り、他は一人は下で篩を受けて居る。」(ibid. S. 414) 此等に於て見る如く、カントは「Träume」の實踐的要求に對し一先づ安住の地を與へえたわけである。

併し未だ範疇と理念、悟性と理性等の區別がなく、悟性は現象を比較分類する論理的使用(usus logicus)の外、その經驗に由來しない純粹悟性概念による實在的使用(usus realis)を有する。(ibid. S. 393) 第一批判の先驗的分析論の結果、カントは範疇の超越的使用をば理論的に禁止したのである。が、此處では未だかゝる制限は附せられてゐない。先驗的感性論の基礎は確立せられ、先驗的辯證論の精神も明かにせられたのであるが、先驗的分析論を大成するには更に十一年の冥想を要したのである。此の

分析論の所説にも拘らず、カント自ら物自體に實在性、因果性、數多性等の範疇を適用した事實は、矛盾の甚だしきものとして、多くの非難を招いたのであるが、之は一先づ彼本來の實在論的體驗と共に、一七七〇年の就職論文の實在的使用が清算せられずに残つて居たのであると歴史的、文獻學的に説明出来る。併し之は單なる説明であつて基礎づけではない。元來物自體なる假定は、カントに於ては範疇により論理的に推論せられたものでなく、範疇以前の根本要請であることを第一に念頭に置くことが必要である。此の具體的理解は我々の既に得たところと信ずる。併し範疇の問題は範疇の問題である。カント自身の教説によれば人間的認識の正當なる範圍は自らの範疇的構成にかゝる現象界に限る。範疇を可能的經驗の範圍を越えて用ふることは、それ自體としては、思惟の自由であるが、語の嚴密な意義に於ける認識を與へえない。何者、認識はカントによれば直觀と概念との綜合である。思想を實體化する舊式な形而上學に反對し、存在と思惟とを謙遜に人間らしく分離して、希臘的な「汝自身を知れ」(γνώθι σεαυτόν)に答へたカントの立場からすれば、物自體につき立言することは矛盾ではないが、理論的には蓋然性以上に出ない。従つて現象の原因としての、觸發する物自體なる概念はカント自身の立場からすれば單なる限界概念以

上に何等積極的の意味を要求しえない。現象なる概念そのものが物自體を豫想すると言ふのは全然證明にならない。物自體は消極的に感性の僭越を制する爲め、又唯物論の跳梁を抑止する爲め、而して積極的に、カントに於て殊に重要なことであるが、理論的要求と常に並行して居る實踐的要求の爲め、外見的理論的矛盾にも拘らず要請せられねばならなかつた。此の點に關し、カント自身の叙述の不明確に基きウインデルバントの如く、カントの物自體に對する確信を疑はんとする人があるが、カント自身の確信には斷じて動搖はなかつたのである。(Windelband, *Über die verschiedenen Phasen der kantischen Lehre von Ding an sich*, Vierteljahr. f. wiss. Phil. u. Sz. I.) カントに於ける理論的要求と實踐的要求との並行については上の簡單な叙述に於ても我々の知り得たところである。而して單なる説明ではあるが、彼の出發點以來の實在論が、第三者の評價如何に關せず、物自體の定立に力強い支援を與へたことは看過しえないと思ふ。では物自體の基礎づけは何處に求むべきであらうか。物自體なる概念を單なる作爲又は理念とする人々に反對し、生きくした現實にふさはしく、現象を實在的な物自體の上に築かんとするアーディックス等等は範疇を理論的立場に於て二義に分ち、單に直觀の多様に關する綜合的機能と解する外に「客觀一般に妥當する」とこ

ろの先天的に與へられた概念と理解することにより「觸發する物自體」を基礎づけんとする。併しそのまゝではカントを一七八一年から一七七〇年に引き戻すことに外ならない。では觸發する物自體に關する範疇の問題は結局何により解決せらるべきか。ヤコービ等の考へた如く、カント哲學は物自體の上に顛覆せねばならぬであらうか。我々はカントを生かさんとする限り、カント自身をして語らしめるのが得策である。第一批判で範疇の超感的使用を排しながら、敢て自ら矛盾を犯して居る事情は第二批判に於けるカント自身の語で説明せられると思はれる。カントは其處に「思辨に於て拒否せられた範疇の超感的使用が實踐理性に於て許されると云ふ批判の謎 (Rätsel der Kritik) は所謂實踐的使用の眞義を了解することにより解かれる。」(W. V. S. 7)と言つて居る。更に具體化せられた思想では「原因性なる概念を本體に適用する制約を發見するには、何故我々は此の概念を経験對象に適用するのに満足しないで、これを又物自體そのものに適用しようとするのであるか、と云ふことを想起さへすればよい。すると、我々に此のことを必要ならしめるのは理論的目的ではなくして實踐的目的である、と云ふことが直ぐ明かとなる。」(Ibid. S. 54) 即ちカントは第一批判の物自體が批判の謎であり、矛盾であることを認めるが、一步高い

立場で之を解決して居る。これを認識論に於ける實踐理性の優位として非難するのは早計である。かくて消極的に感性の越權を制し、唯物論に備へる限界概念としての物自體、實踐理性の優位に確固たる基礎を有することになり、實踐的使用によつてのみ積極性を獲得することになる。此のことはカント哲學が單に形而上學の破壊者でなく、人間的自覺に基く新しい形而上學の爲め、道を招いたものであることを示す。

さて「純粹理性批判」の物自體はロックの things themselves からとつたものであると言はれるが、(Riehl, *Der philosophische Kriticismus* I S. 400) 物自體 (Ding an sich) の實質は就職論文及びそれ以前の所謂實體 (Substanz) であることは疑ひえない。而して周知の如く、第一批判では實體は在來の意味に用ひられてゐる外に、實體は偶性と双關概念として關係の範疇中に位置づけられ、更に經驗の第一類惟に於て具體的に圖式化せられ、實體は物質と同一視せられて居る。(A. S. 182=B. S. 225)

之を要するに、我々は認識論の立場に留る限りは物自體を要しないが、といふのは、認識の批判は認識の所與性を前提して、認識の普遍妥當的内容は如何にして可能であるかを知らんとするので、認識が如何して存在するかを問題としない。色や音等

の感覺が如何して存在するかを問ふのは、何故人間は食ひ且つ考へ、且つ眠るのであるか、と問ふと同様純形而上學的な問題である。併し一度認識論を去るや物自體の問題は、實踐的問題を離れても、表象起原論と結合し(我自體も物自體の一態である)愛知者を把へずにおかないであらう。何者、物自體の假定は思惟の越權ではなく、寧ろ思惟の謙遜に基づくさへ思はれるから。

(終り)